

国 語  
問 題  
用 紙

組 番 号	氏 名
3年 組 番	

一 山田さんは、国語の授業で【I】の文章を読み、内容の一部について【II】のようにノートにまとめました。後の(一)〜(五)の問いに答えなさい。(【I】はページごとに上段から下段に続いている。)

### 【I】授業で読んだ文章

高校に入学した桃子は、親友の綾美を誘い、短歌を創作する「うた部」に入った。「うた部」は短歌甲子園の県大会予選で、桃子の作った五・七・五の上の句に、綾美が七・七の下の句を付けられず敗退してしまう。大会後、打ち上げの場に姿を見せない綾美を心配した桃子が電話をかけると、「星見台公園にいる」と言った。桃子は、部員たちと共に、顧問の先生の車で綾美を迎えに来た。

「みなさん、本当にすみませんでした」

綾美は頭をさげた。そして笑顔を小高くなった丘に向け、

「せっかくだし、星空を見にいきませんか」

と指さした。この先の駐車場から、坂道をもう少し登ると、星空観察ができる芝生公園がある。

「何言ってるの、心配させておいて」

いと先輩は言うけど、表情はにこやかだ。

「行こう。めっちゃ、ロマンチックやん」

清らさん、ここは大胆に業平先輩の手を取る。私も綾美の手を離さず、あとに続いた。

「先生、車で待っててもいいですよ」

「いやだよ。怖いだよ」

いと先輩のほうが年上みたいだ。

周囲に生い茂る植物のせいだろう、街なかよりずいぶんとひんやりして心地よい。

照明灯はあっても、それほど明るくない。星を観察するための施設だから、当然かもしれない。

足もとに気をつけながら、綾美と手をつないで歩く。もともとは天文観測の施設も建てられるはずが、予算が削減され、公園だけになったという。先生は星見台公園の成り立ちを説明するけど、私は①綾美がどうしてここへ来たのか、そちらのほうが気になる。

階段状になった坂道を登りきると、突然、暗闇と星空だけの空間に出た。宇宙の子どもになった気がした。

広い芝生の上に、私たちは頭を中心にして放射状に寝転がった。星が心の内側にまで入り込んで輝く。輝きは街から眺める星のそれとは違って、空には星磨き職人がいて、ひとつずつ星を磨いて回っているような、そんな気がする。

「半月のわりに、星がけっこう見えるんですね」

業平先輩が言うと、

「半月は満月の八パーセントしか光の量がないんですよ」

綾美が答えた。まだ南のほうにある半月はこれからゆっくりと西へ向かう。天気が下り坂なのだろうか、仲間からはぐれてきたようなまだら雲が、月の前をよぎる。昔私がこれを羊雲と呼ぶと、羊雲は秋の雲だと綾美が教えてくれた。そして、羊雲が現れると雨になるということも。

「桃子、私やつと見つけたんだよ」

綾美が不意に言った。

「今日大会で、桃子があんなに素敵な上の句を詠んでくれて……私、絶対に自分で納得できる下の句を付けたかったの。一度書きかけて、すぐに、あつ違ふと思っちゃった。あそこから頭の中が、ぐじゃぐじゃになっちゃって。でも、適当に書くことだけはしたくなかった。先輩たちから、いっぱいいい言葉もらったぶん、とってつけた言葉じゃなくて、自分の言葉で下の句を続けたかった。結果、できずに負けちゃったけど。」

A

「そんなのいいよ」

いと先輩の声が、頭の上からした。

草と土の匂いを風が運ぶ。

清らさんが、「あ、流れ星」とつぶやいた。

「だから、駅で別れてからもずうつと歩き回って、下の句を探したんだ。夜までには絶対に探し出して、披露したかった。『うたうとは小さいのちひろいあげ』。あの上の句を、何度か繰り返しているうちに、気づいたの。今まで生きてきた中で、一番幸せだったときのことを思い出してみようって。そうしたら、桃子とここでこうして、星空を見あげたときのことを思い出して、気がついたら、バスに乗ってたの」

「キャンプのときだったよね」

小学校六年の夏だ。すぐそばにキャンプ場があって、人工池で、魚の手づかみをした。そして夜は星空観察。

「B」

「えっ？」

「ようやくできたの。納得いく下の句が」

先生も先輩たちも、ずっと黙って話に耳を傾ける。

綾美が私の手を握った。

雲が流れて月を隠した。

私は星に語りかけるように詠んだ。

「うたうとは小さいのちひろいあげ……」

「……宇宙へ返すぬくもりをそえ」

綾美の指先からそのぬくもりが、力強さと一緒に伝わってきた。

私が初めからもう一度詠み始めると、綾美も声を重ねた。

『うたうとは小さいのちひろいあげ宇宙へ返すぬくもりをそえ』

綾美はなんて誠実なんだろう。そしてこの歌は二人の歌。私も誠実でありたい。

「C」

綾美が私を見ていた。

「そばにいてくれて」

「……………」

「ずっと見ていてくれて」

つないだ手を握り返すと、綾美の言葉が、身体に流れ、溶けて、広がり、心を癒やしてくれる。

「私のほうこそ、ありがとう」

少し風が冷たくなった。

「そろそろ帰ろうか」

いと先輩の号令で、みんなが起きあがる。

草を払い、立って見あげた夜空に、月がまた姿を見せた。上弦の月はまだら雲のせい、怪しげな光を放ちながら不安げに揺らめく。まるで人の心のようにだ。

「あっ！」

と、私は声を上げていた。

歩きだした全員が立ち止まる。

「D」

不思議そうに、綾美が私を見る。

「今、ふっと歌が浮かびました」

そして詠んだ。

『ゆらゆらと雲のあいまに浮かぶ月わたしはなにを失くしましたか』

何も失ってはいない。月に向かって、胸を張ってそう言いたかった。不安はある。けれど、たとえ強がりだと言われようとも、明日という日がある限り、私も綾美も、何も失ってはいない。

自分の想いを、言葉に託すことをあきらめない限り。

(村上しいこ「うたうとは小さいのちひろいあげ」による。)

○ 本文中の……の歌の工夫と効果について考える

	上の句	下の句
工夫	<p>雲のあいまに浮かぶ月の揺らめきと、  <span style="border: 1px solid black; display: inline-block; width: 1em; height: 1em; vertical-align: middle;"></span>に揺れる桃子の心が重ね合                      わされており、「ゆらゆらと」という五音                      でその様子を表現し、詠み始めていると                      ころに、心情をわかりやすく伝える工夫                      がある。</p>	<p>月に向けての問いかけという形で、桃子                      の想いを表現している点に工夫がある。                      ←                      〈桃子が心の中で出した答え〉                      直接表現されてはいないが、桃子がこの                      歌で伝えたい想いが込められている。</p>



② 短歌を詠むことを通して桃子が気づいたことを明らかにするとともに、  
 これからも歌を詠み続けていこうという桃子の決意が強調されている。

(一) 【Ⅰ】に ① 綾美がどうしてここへ来たのか とあるが、綾美が公園へ来た理由について説明した次の文の  に入る最も適切な言葉を、本文中から十二字で抜き出して書きなさい。

綾美は、桃子が大会で詠んだ上の句を何度も繰り返しているうちに、今まで生きてきた中で一番幸せだったときはいつだったかを思い出してみようと考えた。そして、桃子と  が頭に浮かんだ綾美の足は、自然とこの公園に向かっていった。

(二) 【I】の  A  D  に入る言葉として、最も適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選んで、その記号を書きなさい。

ア どうしたの桃子？

イ 先輩ごめんなさい

ウ ありがとう……

エ ねえ、桃子、上の句をもう一度言ってみて

(三) 【II】の  に入る最も適切な言葉を、本文中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

(四) 【II】に ② 短歌を詠むことを通して桃子が気づいたこと とあるが、それはどのようなことか。その内容を、本文中の言葉を使って、二十五字以上、

三十字以内で書きなさい。(句読点を含む。)

ただし、「想い」「言葉」という二つの言葉を用いること。

(五) 【I】の表現の特徴として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 比喻表現を効果的に用いて、情景を印象深く描き出している。

イ 客観的な視点の語り手により、人物像や心情を淡々と表現している。

ウ 短い会話文のみのストーリー展開で、文章全体に余韻を残している。

エ 同じ言葉をくり返し、たたみかけるようなリズム感を出している。

青木さんたちは、国語の授業で、【I】の古典の文章を読み、【II】のように内容についてグループで話し合いました。後の(一)～(五)の問いに答えなさい。

【I】古典の文章

※1と ば ぼうぼう

鳥羽僧正は近き世にはならびなき絵書なり。法勝寺の金堂の扉の絵書きたる人なり。いつほどの事にか、

(今の世には並ぶ者のない絵かき)

(いつごろ)

供米の不法の事ありける時、絵に書かれける。辻風の吹きたるに、米の俵を①おほく吹き上げたるが、塵灰のごとく

(寺に納める米の不正)

(それを絵にお書きになった)

(つむじ風)

①

(ちりや灰)

に空にあがるを、大童子・法師ばら走り散りて、取りとどめんとしたるを、さまざまおもしろう筆をふるひて

※2おほわらは

(法師ども)

(取り押さえよう)

書かれたりけるを、誰かしたりけん、その絵を院御覧じて、御入興ありけり。その心を僧正に御尋ねありければ、

(たれのしわざであるうか)

(興味深く思われた)

(その絵の意味するところを)

「あまりに供米不法に候ひて、<sup>②</sup>実の物は入り候はで、糟糠のみ入りて軽く候ふゆゑに、辻風に吹き上げられ

(供米の不正がございまして)

(入っておりません)

(米ぬか)

候ふを、さりとはとて小法師ばら取りとどめんとし候ふが、をかしう候ふを書きて候。」と申されければ、

(このままにはおけないと法師どもが)

(申し上げたところ)

「比興の事なり」とて、それより供米の沙汰きびしくなりて、<sup>③</sup>不法の事なかりけり。

(けしからぬこと)

(取り締まり)

(なくなつたのである)

※1 鳥羽僧正 平安時代の僧。

※2 大童子 僧に仕える少年。

※3 院 上皇または法皇のこと。

青木  
志村  
水田  
青木  
志村  
水田

鳥羽僧正は、どんな目的があつて絵を書いたのでしょうか。  
 風に舞う米俵を取り押さえようと走り回る法師たちの **A** 様子を表現したかったのだと思います。  
 鳥羽僧正は、「**B**」であつたのだから、きっと臨場感のあるすばらしい絵だったのでしょね。  
 なるほど。でも、鳥羽僧正はこの絵を書くことで、供米の不正を正そうとしたのだとは考えられませんか。  
 確かにそのようにも考えられます。でも、『誰かしたりけん』とあるから、鳥羽僧正が院に絵を見せたとは限らないと思います。  
 そうすると、なぜ院が絵を目にすることになつたのかということも気になりますね。

(一) 【Ⅰ】の ① おほく の読み方を現代仮名遣いに直して、全て平仮名で書きなさい。

(二) 【Ⅰ】に ② 実の物 とあるが、ここでの意味として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 本物のお金      イ 本物の米ぬか      ウ 本物の絵      エ 本物の米

(三) 【Ⅰ】に ③ 不法の事なかりけり とあるが、そうなつた理由として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア 僧正たちが、走り回りながら供米の厳しい取り締まりをしていると知り、院が心を痛めたから。  
 イ 塵や灰のように空に舞い上がった米俵を取り押さえようとする僧正たちを、院がとがめたから。  
 ウ 院が絵によつて供米の不正を知り、けしからぬことだと言つて取り締まりを厳しくしたから。  
 エ 僧正が書いた絵によつて、供米の不正が世間に知れ渡り、皆が米をおさめるようになったから。

(四) 【Ⅱ】の **A** に入る言葉として、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

ア こっけいな      イ ほがらかな      ウ てごわい      エ つつましい

(五) 【Ⅱ】の **B** に入る最も適切な言葉を、【Ⅰ】から十二文字で抜き出して書きなさい。

次の文章について、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。(①)～(③)は段落番号を表す。

① 人間は、自分や自分を取り巻く世界について理解したいという欲求をもっている。その欲求は、未知の事柄について、自分がすでに獲得してきた知識を使って解釈したり、その事柄の中に規則性を見出みいだそうとしたりすることへとつながるのである。この過程で、予期に反して思ったようにならない、あるいは、予期したことと全く異なることが生じる、という場合も少なくない。これらは「あれ？」という驚きの感情を引き起こし、さらに、それについて調べたり、考えたりしようとする動機づけとなる。すでに獲得した知識が豊かであればあるほど驚きも強く、その結果、もっと詳しく調べたり、深く考えたりするようになり、実際にそうした一連の活動を展開することによって、その事柄について前よりも深く理解することができるようになるのである。

② あるとき、何人かの子どもにも磁石を貸して遊ばせたことがある。ひもで結んだ磁石を垂らして近づけると、ある物体には付き、ある物体には付かないという現象は、彼らにとって非常におもしろく感じられるものらしい。彼らは、さかんにいろいろな物体に磁石を付けてまわった。

A

、金属には付くが、紙や石には付かないということに気づいた。

B

、磁石には普通、何が付き、何が付かないかについての

ひと通りの知識を彼らはもつことができたのである。そのうち、彼らは、一見普通の石と変わりが無いのに磁石に付く、金属だと思えるのに磁石が付かないという現象に出会った。そこでは、「あれ、変だなあ。」という驚きの感情から知的好奇心が引き起こされ、もっとよく調べてみようとする探究活動が始まった。子どもたちが遊びを終えた時点で、どんな物体が磁石に付くかを聞いてみた。すると、探究活動に熱心に取り組み、そこから多くのことを学んだ子どもほど、正確に答えることができたのである。

③ このことからわかるように、未知の事柄に出会うと、まず、驚きの感情が引き起こされ、知的好奇心がかきたてられる。次に、その答えを知るために、実際に実験して確かめてみたり、本で調べたり、考えてみたりという探究活動が、他人に強制されなくても展開されるのである。こうして獲得された知識は、生きた知識としていろいろな場面で活用できる。さらに、この生きた知識は、新たな知的好奇心を引き起こす原動力となり、再び未知の事柄へと向かわせるのである。

(稲垣佳世子・波多野誼余夫「人はいかに学ぶか」による。一部改)

(一) 予期に反して思ったようにならない、あるいは、予期したことと全く異なることが生じる。とあるが、その具体例を示している一文を、本文中から抜き出して、その初めの五字を書きなさい。(句読点を含む。)

(二) 本文中の **A** と **B** に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

- ア A ただし B けれども  
 イ A やがて B こうして  
 ウ A なぜか B あるいは  
 エ A しかし B なぜなら

(三) 鈴木さんは、本文の要旨をまとめるために、図 I を書いた。その後、本文を読み直し、図 II のように書き直した。図 I と図 II の二か所の **□** に共通して入る最も適切な語句を、③段落中から五字で抜き出して書きなさい。

図 I

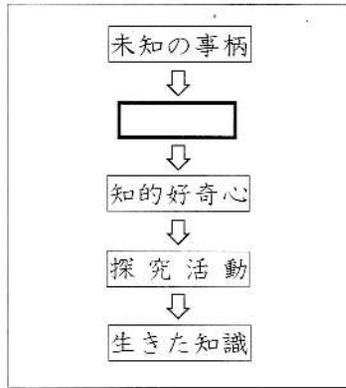
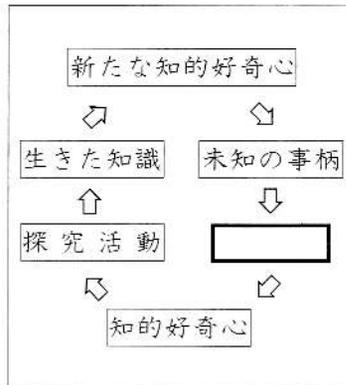


図 II

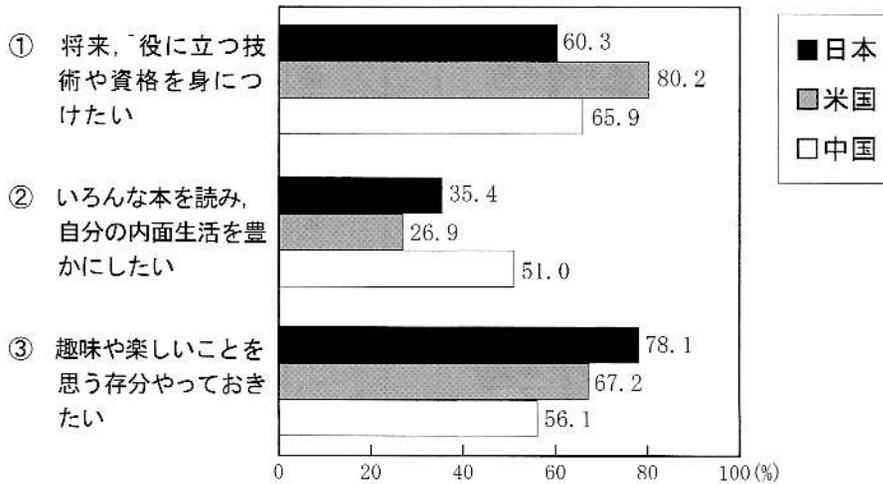


(四) 本文で述べられている内容として、適切でないものを、次のア～エの中から一つ選んで、その記号を書きなさい。

- ア 人間はもともと、自分や自分を取り巻く世界を理解する能力をもっている。  
 イ 知的好奇心により、詳しく調べたり考えたりする行動が、探究活動である。  
 ウ 獲得した知識は、新たな知的好奇心の原動力となり、未知の事柄へ向かう。  
 エ 詳しく調べたり、深く考えたりする活動によって、物事への理解が深まる。

次の資料を見て、下の問いに答えなさい。

### 若いうちにぜひやっておきたいこと



注1 日本青少年研究所「高校生の意欲に関する調査報告書(2007年発行)」により作成

注2 調査国、調査項目の中から3つの国と3つの項目を取り上げたもの(このグラフの調査対象は日本・米国・中国の高校生、計約5,000人)

上の資料は、日本・米国・中国の高校生に、「若いうちにぜひやっておきたいこと」について調査した結果を表したものです。資料は、回答者が、①②③のそれぞれの項目について、「ぜひそうしたい」と答えた割合を示しています。この資料を見て、あなたの考えを書きなさい。

ただし、以下の条件に従うこと。

- 1 百字以上、百五十字以内で書くこと。(句読点を含む。)
- 2 二段落構成とし、第一段落には、上の資料から読み取れることを書き、第二段落には、あなたが若いうちにやっておきたいと思うこととその理由を書くこと。
- 3 正しい原稿用紙の使い方をすること。ただし、題名と氏名は書かないこと。また、{ } や || などの記号(符号)を用いた訂正もしないこと。
- 4 文体は、敬体「です・ます」で書くこと。

## 五

次の(一)～(四)の問いに答えなさい。

(一) 次の(1)～(6)の——線部について、片仮名の部分を漢字で、漢字の部分の読みを平仮名で書きなさい。(漢字は楷書がいしよで書くこと。)

- (1) モケイ飛行機を飛ばす。
- (2) 申し出をコトワる。
- (3) シンセイな行事。
- (4) 都会での生活に憧れる。
- (5) 助走をつけて跳躍する。
- (6) 資料の提出を促す。

(二) 「射」と総画数が同じものを、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

- ア 座      イ 頂  
ウ 衆      エ 段

(三) 「歳月人を待たず」ということわざの意味として最も適切なものを、

次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

- ア 失敗したことを後でくやんでも、取り返しがつかない。  
イ 普段から準備しておけば、何かが起こっても心配がない。  
ウ 立ち去るときは、後の始末をよくしておくべきである。  
エ 時のたつのははやいから、時間をむだにしてはならない。

(四) 「山本さんの声が聞こえた」の「山本さんの」と「声が」の文節どうしの関係を、次のア～エの中から選んで、その記号を書きなさい。

- ア 並立の関係  
イ 修飾・被修飾の関係  
ウ 主・述の関係  
エ 補助の関係